

陸上クラブ紹介

No. 10

川中島ジュニア ランニングクラブ

川中島ジュニアランニングクラブは、5年目を迎えました。

長距離の楽しさを味わってもらい、又、誰にでも出来、誰もが強くなれる可能性を秘めている小学生、中学生を募集して活動しております。練習場所は丹波島橋南の河川敷周辺でやっております。

当初は、4名でスタートしましたが、現在は小学生4名、中学生16名です。中学生は、川中島中、裾花中、松代中、篠ノ井東中、更北中と、多くの中学校から集まってきてきています。各学校の陸上部の顧問の先生方には大変なご理解をいただき、感謝いたします。

成績も、今まで県中学駅伝で、女子が準優勝と、個人で全中出場。また、今年有加藤未有人さんが全中出場とオリンピックで7位入賞、東日本駅伝・県縦断駅伝で活躍してくれました。小学生の女子2名も市町村駅伝小学生の部で、長野市チームの準優勝に貢献してくれました。子ども達も、夢と高い目標を持ってこれからも頑張ってもらいたいと思います。また、このクラブを卒業した子ども達が高校の陸上部で活躍してくれています。それがまた嬉しいです。

最後になりましたが、長野市陸上競技協会の皆様には、大会運営等大変お世話になり、感謝申し上げます。今後とも宜しくお願い致します。

監督 竹内万祐



SHINANO MATE
ATHLETIC UNIFORM
株式会社 しなのメイト
〒389-0606 埴科郡坂城町大字上五明992-2
PHONE (0268) 81-1336
F A X (0268) 81-1337

編集後記

平成17年11月の競技会、夏から秋のトラックシーズンに比べ、岡山の国体以後、駅伝シーズンとなった。

11月3日(木) 文化の日 県中学駅伝(松本)

11月6日(日) 県高校駅伝(大町)

11月13日(日) 東日本女子駅伝(福島)

11月19日(土) 20日(日) 県縦断駅伝(長野~飯田)

平成17年12月

12月4日 県ロードレース(須坂)

12月18日 全国中学駅伝(千葉)

12月25日 全国高校駅伝(京都)

正月元旦は全日本実業団駅伝

正月の2日3日の両日は1年で一番楽しい箱根駅伝と続く。本県の3連覇がかかる男子駅伝も最高に期待できる大会だ。

ここで駅伝日程からころっと話題が変わる。

先日、平成17年11月23日 勤労感謝の日、そして長野市では6000発の美しい煙火打ち上げであるえびす講。夜、18時から20時の2時間連続の開催された当日にもなりましたが、この記念すべく100年

目、寒い夜はもえ上がり候。この23日、千曲市の倉島喜代竹先生に同行して、一路松本市の総合体育館へ直行、広報委員会の開催です。会議は1時間以上かかって「個人情報保護法」。2005年4月から全面施行されました。これに対する県陸協の対応です。この会議だけで決められる問題ではありません。要覧の作成にも影響が出てきますし、皆様のご協力も頂くことにもなりそうです。氏名や住所、そして電話番号、携帯電話番号等、プライバシーに関する事など、今までの様に要覧一冊で全てが役に立つ時代は終わるのでしょうか。何か名案が生まれたいと思います。私が勝手に考えて心配してもはじまることではないので、ここは難しく、詳しいことは県の偉い先生方のご指導に従うべく、今から頭の痛いことになりそうです。

12月から来年にかけて駅伝やマラソン等が続きます。選手や監督、コーチ、それらに関わる皆様方のご活躍を心よりお祈り致します。

平成17年12月 広報部長 若松軍蔵



題字の「動き」は長野市陸協三代目会長 山浦保氏の書で、山浦会長の頃、市陸協会報紙として何号か発行されていました。

平成17年12月19日

発行所 長野市陸上競技協会
発行人 浦野義忠
編集人 若松軍蔵

県縦断駅伝3連覇ならず

第54回長野県縦断駅伝大会が、11月19日から20日まで2日間にわたって行なわれました。今回は、例年に無い、長野、諏訪、上伊那の3

チームの、手に汗握る2日間の熱戦が繰り広げられました。残念ながら、僅差で3位の成績で終わりました。

長野県縦断駅伝を終えて

第54回長野県縦断駅伝競走大会が、各地域の代表15チームに別れ、2日間の日程で競われました。

今大会は、市町村合併に伴うチームの再編成に向け、最後の大会と言うこともあり、大変意義深い大会でもありました。

レースは、1日目、信濃毎日新聞社(本社)前をスタート、熱戦の火蓋は、切って落とされ、我が長野市チームは、昨年度まで2連覇、当然今大会も3連覇、また2日間通しての完全優勝を目標に大会に挑みましたが、レース数日前に登録選手の問題を指摘され、8区を走る予定の選手を急遽変更という事態を招き、選手、長野市陸協の各関係者の方々に大変ご迷惑をお掛け致しましたこと、この場をお借りしまして深くお詫び申し上げます。

選手はそうしたアクシデントにもめげずに、自分の持てる力を出し切る走りは、できたように思います。

2日間通して、上伊那、全諏訪、長野市、各チームがデットヒートを繰り広げ、最終区間(20区)まで

長野県縦断駅伝を終えて

徳武 雄次郎

はじめに、長野市陸上競技協会の皆さまへ日頃の力強いお力添えに対しまして、心より御礼申し上げます。また、この度は敢闘賞をいただきましたことを大変光栄に存じます。本当にありがとうございました。

さて、3連覇を意識した今回の駅伝でしたが、惜しくも3位という結果でした。しかし、内容的にはとても充実したものであり、駅伝ならではの醍醐味を感じました。私自身、市町村駅伝後、足の故障をし、走ることが走ることができるようになったのは10月頃でした。その間どうしたらよいのかわからない自分は、様々な方にアドバイスをいただき、決して無理をしないように「今できること」をやっているだけでした。この時、走れないことがこんなにも辛いものであるのかと思ひ知らされました。それから遅れを取り戻す

長野市駅伝部 監督 田中哲広

勝負は持ち込まれましたが、最終区で、上伊那チームが全諏訪を逆転。長野市チームも2日目に先頭に出る健闘を見せましたが力及ばず3位という結果に終わり私を含めまして、大変くやしい思いをしました。

しかしながら、2位の全諏訪とは17秒差、優勝した上伊那とは1分35秒差と、タイム差にして1人5秒程の差でしかありません。来年度は、この今年のくやしさを胸に秘め、V奪回を目指していきます。

最後に、今年度も長野市駅伝部を応援していただいた方々に感謝申し上げ、今後とも変わらぬご支援をよろしくお願い致します。



うと必死でした。お陰さまで、思っていた以上に順調に回復していきました。襷を受けた時は3位でしたが、「何が何でも勝つ。負けるものか」と、上伊那とはつばぜり合いでした。上伊那を応援する「長野市に絶対負けるな」という声は、自分に言われている言葉だと感じとり、必死でした。結果、ゴールでは同タイムでしたが、胸の差で3位ということでした。そのことも大変勉強になりました。最後になりましたが、いつも温かく見守ってくださる駅伝部のみなさんや家族に感謝申し上げます、今後ともご指導を賜りますようお願い致します。

長野県縦断駅伝に出場して

広徳中学校 佐々木健太

11月19日、20日と長野県縦断駅伝に出場させて頂きました。僕は、20日の18区を走りました。

1日目、長野市は上伊那と同着でしたが、着差で3位でした。いままでの長い歴史の中でもめずらしいことがおこり、本当におどろきました。

2日目、なんだか1位になったものの僕の前では3位でした。1区のスタート地点で緊張していると、昨日9区を走った前島さんが来てくれました。「自分の走り、落ち着いて走れ」と言われ、自分も心強くなり走り始めました。1位とは、1分以上離れていたのとおりあえず落ち着いて走ろうと思いました。1kmぐ

らいで松本に追いつきました。2km以降1人になってしまい、つらくなりましたが、沿道の人々に応援して頂いて、何とか最後まで走り切ることができました。結局、僕がたすきを渡した時は2位で、1位と36秒差でした。あとでタイムを聞き、区間新を出すことができたのでとても驚きました。

2日目の結果は2位でしたが、総合で3位になりました。けれど、自分の力を精一杯出し切れたので良かったです。

この大会では、沢山の人々にお世話になり、本当に得るものが多かった大会でした。

県縦断駅伝ご支援ご協力のお礼

長野市陸上競技協会 会長 伊藤利博

第54回長野県縦断駅伝大会の長野市チームに、多くの企業、個人の方々から多額の賛助金を賜り誠にありがとうございました。今回は残念ながら3連覇を果たすことができませんでしたが、この悔しさを来年に向けて頑張る所存でありますので、今後共ご支援、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

ご支援いただいた企業名、個人名を掲載させていただきます。 敬称略 順不同

㈱アイフ微章 ㈱日詰自動車板金 奥アンツーカー 長谷川体育施設 中央館清水屋旅館 ㈱長野スター商会 御宿 記念館 ㈱中屋スポーツ ホテル信濃路 長野ホテル 犀北館 古澤久二郎 轟正満

長野県高校駅伝3連覇と都大路に向けて

長野日大高校 駅伝監督 山田憲一

17年度長野県高校駅伝大会では、多くの皆様方にご支援、ご協力をいただき誠にありがとうございました。

女子駅伝チームは、11月6日(日)大町陸上競技場において、アンカー青柳はるか(2年)が笑顔でのフィニッシュ、1時間14分40秒のチーム最高記録で、2位の松商学園高校に2分09秒の大差をつけて3連覇を成し遂げることができました。これも選手の日々の努力はもとより、陰ながらチームを支えてくださった方々の心温まる励ましがあつたからこそと感じています。日大高校女子駅伝チームが、3大会連続で都大路を走らせていただけると感謝もひとしおです。

1昨年、初出場として乗り込んだ都大路では58チーム中57位。そしてリベンジをと臨んだ昨年の都大路では2区以降で失速し、まさかの44位と2大会連続で全国大会の厳しさ、難しさを嫌というほど思い知らされた結果となり、本当に悔しい思いをしました。

今年は「都大路で戦える競技力と精神力をつけよう」と、選手と共に1年間練習に励んでまいりました。高

いレベルを肌で感じたことから、大学の長距離競技会へ積極的に参加するなど経験を深め、距離への不安をなくし、全員5kmを走れる選手を目指して、年6回の強化合宿を行ない、夏期休業中には4~5泊の合宿を3回(菅平→裏磐梯→富士見)と精神的に活動しました。特に磐梯山では、田村・市立船橋・那須拓陽高校といった強豪チームと合同合宿を行なったことで、身体的にはもちろん、精神的な部分も鍛えられ、選手は大きく成長したのではないかと思います。それもあってか、新人戦では齊藤千聖(2年)が県大会3000mで9分35秒54の好タイムで準優勝。大会記録を10秒破るものでした。また、主力選手の1人、青柳はるか(2年)も県大会で2種目上位入賞。10月の日体大記録会では1年生の小山・和田が3000mでともに自己記録を大幅に更新しました。また、北信越高校駅伝大会では、主力を欠いた状態でチーム記録を20秒短縮し、6位入賞。チーム力は昨年とは違い、全体的にレベルアップし、底上げも進んでいます。また、12月11日(日)に行なわれた日体大記録会でエースの齊藤が、5000mで16分10秒66のタイムを出し、14年ぶりに県高校記録を塗り替えれば、主力の3人も自己記録を更新し、今年は良いチーム状態で入浴できそうです。全国大会での目標は1時間11分台で25位。今年は前半から勝負し、思い切ったレースをしてきます。

郷土の代表としての誇りを胸に、支えてくださる方々への感謝の心と、地域や学校、そしてチーム全員の願いを糧に込めて、一杯走ります。長野日大女子駅伝チームの応援をよろしくお願い致します。

女子第17回全国高校駅伝は12月25日(日)10時20分、京都市西京極陸上競技場を出発、全国47都道府県の代表が師走の都大路を駆け抜けます。



写真5 11-22

第7回 ホープさん

松代高校 今村 瞳

松代高校陸上部12名の内、唯一女性選手の1年生、今村瞳。今年は走高跳でインターハイや国体に出場することができ、来年に生きる貴重な経験をさせていただいた。来年もよりレベルの高い大会に出場し、本人の力を試してもらいたい。

今シーズンは走高跳を中心に大会へ出場した。中学時代のベスト記録は1m58cm。インターハイ出場権をかけた北信越大会決勝で1年ぶりとなる中学3年で出した自己記録を跳び、インターハイ出場権を得た。その後も、今村は自己記録を伸ばすことができた。夏の県合宿で、コーチの指導により走高跳の技術を向上させることができ、記録を伸ばした。国体出場をかけた長野県国体予選会で、県合宿で得た技術を発揮し、1m60cmの自己記録で優勝した。そして国体選手に選んでいただき、国体に出場した。

だが、インターハイ、国体ともに全国の舞台では今村の持っている力を出し切ることができなかった。全国のレベルの高さも痛感したようである。しかし、まだ1年生であり、伸びる要素が沢山あ

る。スプリント力もアップしてきている。今後、自分自身を分析し、何が優れていて、何が足りないのか、どんな練習が自分にとって必要なかを考え、練習していくことが記録向上への第1歩である。



本校陸上部員は、多いとは言えないが、毎日切磋琢磨しながら練習に励んでいる。来シーズンに向けての冬期トレーニングも始まった。この1日1日の積み重ねがシーズンに生きる。今村の更なる成長に期待している。

松代高校 監督 下條正紀

思い出の写真シリーズ

第9回

セピア色のピンボケ写真の思い出

長野市陸上競技協会 経理部長 大竹義雄

昔の写真を整理していたら、高校時代のセピア色のピンボケ写真がでてきた。その中の1枚は、昭和20年代後半の北信高校陸上競技大会の入場行進である。当時は高校生の参加できる大会は少なく、春・秋行なわれる高校大会と全信州大会くらいでしたが、したがってセレモニーを大事にとらえ、開・閉会式は大変格調高く、入場行進にいたっては会場校体育主任先生の先導によりつづい

て、前年度総合優勝校男女の捧持する国旗、そして各校選手の威風堂々の入場で、しかも行進曲は会場校プラスバンド部による「生演奏」という念の入れ方で始まったと記憶している。

このような世代のなかで、私が陸上競技に歩み込んだのは、戦後、新学制(6・3・3制)施行まもなくだった。中学校の課外では「男はベースボール・女はバレーボール」しかなく、わんぱく達は、各自工夫して余暇を過ごすという、今では考えられないことだった。遊びの1つとして、竹竿で幅とびに興じているのを見て、仲間に入れてもらい遊んだことが契機で、高校・大学と棒高とびにのめり込み、また、同じ砂場を使うなら見よう見まねで走高とびと欲張った。

時は進み、より高さをと求め、棒高とびのポールは竹竿からスチール、グラスファイバーへと、走高とびのフォームは正面とびからベリーロール、背面とびへと形を変えて、かつての時代は過ぎ去った。競技生活は10年程で、結果はローカルジャンパーにおわったが、その後、競技会の応援団として現在に至っている。今後も更に応援団として努力していきたい。

